

(1) 張一璠著「蘇東坡と巴蜀文化」(要綱)

〔翻 訳〕

## 張一璠著「蘇東坡と巴蜀文化」(要綱)

森 川 登 美 江

蘇東坡<1036-1101。名は軾(しよく)、字(あざな)は子瞻(しせん)、東坡居士(とうばこじ)と号した。蘇仙、蘇長公ともいう。著書に『東坡全集』『東坡易伝』『東坡書伝』などがある。>という中国宋代の百科全書的文化の巨人は、影響深遠な文化人であり、彼の文学創作と日本文化の構成要素は符合するところが多くある。巴蜀<四川省の別名>は蘇東坡の故郷であり、巴蜀文化は蘇東坡の出現と切り離せない縁が有る。

中国の蘇東坡は11世紀に出現した。日本の歴史では平安時代(794-1192)に当たる。東坡は詩、詞、散文、書道、絵画の諸領域において非凡な芸術的才能を現し、“北宋文学の最高の成果を表現した”(游国恩等主編『中国文学史』)具体的に言えば、文に於いては歐陽修とともに“欧蘇”と併称され、“唐宋八大家”<唐・宋二代にわたる8人の古文家。韓愈・柳宗元・歐陽修・蘇洵・蘇軾・蘇轍・曾鞏・王安石をいう>の一人である。詩に於いては、黄庭堅とともに“蘇黄”と併称される。詞<中国の韻文の名。中唐のころ起り、宋代に盛んになった。もと「曲子詞」の略で、当時の歌謡曲の歌詞の意。句の長さがまちまちなので長短句ともいい、また、填詞・詩余などともいう>においては、辛稼軒とともに“蘇辛”と併称され、“豪放派”の詞風を開いた。書道においては、“蘇<軾>・黄<庭堅>・米<芾>・蔡<襄>”のトップにおり、“蘇体”の榮譽を享けている。絵画においては“文湖州竹派”の重要な成員で、理学においてもやはり“蜀学”の主要人物である。彼の作品で伝えられているものは、統計に依れば、詩2700余首・詞300余篇・散文若干篇・書、絵画若干幅である。これは中国文学史・書法史・文化史上きわめて稀なことである。

蘇東坡の意義と価値は二つある。一つは、彼の文学芸術創作は、後世の文学芸術創作の為に新しい領域を開拓し、新しい模範を提供したこと。二つ目は、積極的な人生态度と人格の魅力が後世の人に過小評価できない公示作用と影響力をもたらしたこと。次にそれぞれについて略述する。

第一の面、文学芸術創作の為に新しい領域を開拓し、新しい模範を提供したこと。これ

は以下の数点から説明できる：

(1) “東坡は音律に心酔してはいなかったが、たまたま歌を作れば上昇の道を指し示し、天下の人々の耳目を新たに、字句を弄くりまわす者は初めて自ら奮起することを悟るのである。”(王灼『碧鷄漫志』)“詞は東坡に至ってきらびやかな様態を一掃し、纏綿宛転の状態を脱却し、人々に高きに登って遠望させ、頭を上げて浩歌させ、塵埃の外に超越させた。”(沈約『古今詞話』)ここのいわゆる“上昇の道を指し示し”にしる、“きらびやかな様態を洗い流し”にせよ、具体的に言えば、すなわち蘇東坡は詞作上晩唐五代以来のもっぱら男女の恋情を描き、別れの悲しみを描く古い枠組、狭い範囲をさらに一步突破して、詞の題材を拡大し、詞の意境を高め、詩文を詞に取り入れたということである。およそ懷古・感旧・游記・説理などは従来は詩人が慣用していた題材であるが、彼はみな手際よく詞で表現し、豪放派の詞風を開くことが出来た。これは後世の人に大いに視界を開かせ、“あつ、詞というものはこんな風に作れるのか!”とただちに開悟させたようである。これはたいした創始性を持った貢献であった。

(2) 表現手法の多様性。蘇東坡の筆にかかると、同じ表現題材、同じ描写対象を違った体裁、違った手法で表現できた。試みに赤壁という古戦場を例にとってみよう。「念奴嬌。赤壁懷古」は、現在のことに触れて昔のことをしのび、自らを周瑜<175-210。三国の呉の孫権の武将。魏の曹操の大軍を赤壁で破った。俗に周郎とも称される>に比し、壮志が報われない感慨を述べる。詞人の強烈な時空感、成就感が表現されている。「前赤壁賦」は情景に即して懷古し、著名な散文家としての蘇東坡は、“世間を離れて一人で生きる”、“物と吾みな尽きることなし”の晴れやかで闊達な情を表現した。「後赤壁賦」は実景と夢の世界が互いに融合し、蘇東坡のすばらしい生活に対する無限の憧れの情、高揚、卓見を明示した。これを読めば精神が奮い立ち、“画然として長嘯く声を長く伸ばして詩を吟じること>し、草木は震動し、山は鳴き谷は答え、大風が起り水が湧き立つ”ような感慨を覚えるであろう。

その他、詩・書・画が結合した“文人画”の面でも蘇東坡は貢献している。“常形”(形式)と“常理”(本質)、“形似”と“神似”の問題を提起したのだ。例えば“形似を以って画を論じ”、“古来絵師は俗人ではなかった。物の形を模写するのはほぼ詩人と同じ”等。

第二の面は、積極的な人生态度と人格的魅力の明示作用と影響力である。東坡の全作品は一人の真正な智者の、苦難の中における自我の覚醒と超越をさらけ出したものと言える。彼の全作品が明示しているのは、彼の文章事業上における自信およびそのため政治上遭遇

(3) 張一璠著「蘇東坡と巴蜀文化」(要綱)

した挫折にもいとまたやすく従容として対応した豪放な性格である。同時にまた、人々の感知、思索、模倣に供すべき真実の人生を髣髴させ、それによって無数の後世の者たちに人生モデルの選択空間と文化的な自己設計を提供した。またそのため東坡と後世の読者の間には連綿とした、強固な、常とは異なる懇切で感動的な人文精神の紐帯が構築されたのである。それは後世の詩人、文人の次のような詩文で証明できる：“公<東坡>の詩は一句一句胸のうちを写し、一滴の水が大海となりて奔騰す。……異代に或いは後身有りやと疑い、物故したこの地にその魂を招かん。”(唐順之「読東坡詩戲作」“文章は気骨に合し、固より百世の希望とならん。”(何紹基「留題三蘇祠<蘇軾の父、蘇洵・蘇軾および蘇軾の弟蘇轍を三蘇と称し、かれらを祭った寺>併跋」)“吾、長短句<詞の別称>を讀むに、最も蘇<東坡>>辛<稼軒>を愛す。東坡は胸次<気持ち>>広く、稼軒は力千鈞。”(陳毅「吾読」)“我が郷の蘇長公、俊逸にして才は敵無し。”(郭沫若「題李可染作[東坡、赤壁に遊ぶ]

東坡が後世の人に明示した精神的魅力は、その内容について言えば、主要には次のようになろう：出仕にも隠退にも泰然としている。理想と現実に対して冷静で客観的、臨機応変である。“用捨は時によるも、行蔵は我に在り”；宇宙と人生の追究及び順境にあつての淡泊(“居士、居士、小さな橋は水に流されやすいことを忘れる莫れ”)；逆境にあつての従容(“一蓑の煙雨平生に任ず”)など。

蘇東坡の蘇東坡たる所以は、疑いもなく彼個人の要素と、彼が生きた時代の共同作用の結果である。同時に、我々は巴蜀文化と彼の成長の関係を軽視するわけにはいかない。つまり、東坡と巴蜀文化および巴蜀文化と東坡の間の相互作用関係である。これは郷土文化と人材成長の関係の問題に渡る。これは即ち“地域文化”研究におけるきわめて研究価値のあるテーマであり、同時に“人材学”研究の重要課題でもある。ここではその中の比較的狭い範囲に限って述べる。

四川は古くは巴蜀と称していたので、人々は四川文化に古色蒼然とした名称をかぶせ“巴蜀文化”と呼んでいる。一つの地域文化の概念である。比較的流通している言い方に依れば、巴蜀文化には二つの意味がある。狭義では秦が巴蜀を統一する前の巴蜀時期の文化を指し、広義では四川の古代及び近代の文化全体を指す。(袁庭棟「巴蜀文化・前言」)私がここで述べようとするのはもちろん“広義の”巴蜀文化である。山紫水明の巴蜀の大地は、古より人材が育つ一つの肥沃な土地であった。我々は少しも労力を費やすことなく、巴蜀の古今の有名な名前を多数列挙することが出来る。今、文化領域だけを例にとっても、司馬相如・揚雄・李白・陳子昂・“三蘇”・文同・楊升庵・李調元・郭沫若・吳芳

吉・巴金・李劫人・沙汀・艾蕪・張大千などがあげられる。これらの綺羅星のような巴蜀文化の有名人達は、疑いもなく巴蜀文化の靈魂であり、明星である。同時に、東坡を含む巴蜀文化の著名人達は“突出して世に出”ており、代々人材豊富で、見くびることの出来ない影響力を持っている。

これは蘇東坡にもやはりこの種の影響力の存在を発見できる。我々は次のような点に帰納してよいだろう。

——蜀中文学の東坡に対する影響。

漢代の賦<韻文の一種>、史志文学の成就、陳子昂・李白など風紀を開いた大詩人の出現など、東坡より以前、蜀における文学の峯は重なり合い、壯観だった。これらは蜀で暮らした19年間（東坡先生は19歳ではじめて故郷を離れ、父に従って上京した）に彼に影響を与えなかったはずはない。例えば、紀元701年に生まれた李白は、“月”を描写する名手であった。李白と彼の「峨眉山月の歌」が、蘇東坡に影響を与え、東坡も“月”を描くもう一人の名手となったのではないだろうか。答えはもちろんその通りである。李白より336年後に峨眉山付近の眉山県に生まれた蘇東坡が、李白の影響を受けなかったはずはない。

——“古より騷人<詩人>多く蜀に入る”という現象の東坡に対する影響。

東坡より以前に蜀の人ではない多くの詩人、詞人が巴蜀に“流寓”していた。初唐の“四傑”<初唐の4人の優れた詩人。王勃・楊炯・盧照鄰・駱賓王>中の王勃・盧照鄰、高適、岑參、杜甫、白居易、元稹、劉禹錫、賈島、李商隱、夷庄などである。“古より騷人多く蜀に入る”というこの文学現象の出現は、巴蜀文学にとっては少なくとも二つの作用があった。一つは巴蜀文学の内容（題材・風格を含めて）を豊富にしたこと、二つ目に巴蜀土着の作家と、“蜀に入った”作家の交遊、融合を促進したこと。これは東坡が最終的には詩詞上でこのような成果を勝ち取ったことに全く影響していないはずはない。

——巴蜀の人の粘り強くて包容力のある性質の東坡先生への影響。

古より、巴蜀の大地の珍しい光景と位置上の特殊性が、巴蜀の人々に小さいころから粘り強く包容力のある性格を育てた。高山のように断固とし、大河のように連綿として中断しない粘り強さ。外来の思想文化に対して（“文翁蜀を化す”のように）寛容で、明智による選択と吸収が出来るのである。これが東坡の性格に影響を与えたことは疑いを容れない。東坡の性格中のどんな境遇にも安んじ、闊達で寡欲なのは、巴蜀人の性格の別の一面を照射している。

故にある意味では巴蜀の文化が一代の文化の巨人蘇東坡を育てたのは十分な理由があったのだ。

(5) 張一璠著「蘇東坡と巴蜀文化」(要綱)

同時にまた、我々は東坡の巴蜀文化に対する影響にも言及しないわけにはいかない。簡約すれば、以下の数点が注意に値する。

——その詩文の影響が非常に大きいこと。蜀では広く伝承された“蘇の文章に習熟すれば羊肉を食べ、習熟しなければ野菜スープを飲む”という俗諺は、まさにこのことを説明している。後に“蘇門四学士”の一人となった晁補之のように年齢が小さかった読者は、“年僅か15にして、蘇軾の書を読”んだのである。(崔銘「蘇軾と“蘇門四学士”の知遇と付き合い」)

——“巴蜀文学の集大成者”(『巴蜀文学史稿』)

東坡の人格の魅力と文学芸術の成就が形成したいわゆる“東坡精神”は、蜀の歴代の知識人に非常に明らかな影響を与えた。例えば清代の著名な学者で、万卷楼主の李調元は、四川文人中、“李白、蘇東坡、楊升庵を敬慕した。……蘇詩は、すなわち父の命により流れるように暗誦するのが日課となっていた。”(四川大学歴史系編『冰蘗彩絲集』)

当然、東坡の影響はとくに巴蜀の地を超え、全中国、さらに国外にまで及んだ。こう言える根拠は十分にある。『宋代文学研究現状の定量分析』(『光明日報』2002年10月9日)をした人がいるが、分析の結果、最近5年のうちで、作家研究の分布では“トップは蘇軾で、全作家研究の成果の4分の1を独占している”ことを明らかにしている。問題をさらに明確にするために、その資料を次に摘録しよう。

少数の作家の門前は市をなし、絶対多数の作家には誰も手をつけない。5年間で、2000項近い成果は個人作家に関する研究で、137名の作家に上った。その中で、蘇軾、李清照、辛棄疾、歐陽修がブームと言え、彼らに関する研究成果はそれぞれ575、208、127、108項であった。成果の量で5位から10位にいるのは陸游(89項)、柳永(75項)、黃庭堅(69項)、朱熹(68)、王安石(67)、秦觀(60)であった。トップに位置する蘇軾は、全個人作家研究成果の4分の1を占めている。そして蘇、李、辛、歐個人の研究成果は計1447項で、全個人作家研究成果の72%を占めている。

この数理統計結果は、もとより我々今日の文学研究者達の“勢力に走る”視点を表しており、不公平で、研究構造上の不均衡を招来している。こうした“不均衡”性が出現した原因は様々かも知れず、研究が待たれる。しかし研究者達のこのような“選択”，こうした定量分析の結果は、却って有力に何が経典であり、経典作家であるかということと、東坡の深遠な影響は揺るがせないという結論を証明している。

つまり過ぎ去ったばかりの20世紀も、また21世紀になった今でも、東坡の影響力は終始巨大である。我が中国には中秋節毎に東坡の名句「ただ人が長久で、千里離れても眺める月は一つであることを願う」(「水調歌頭。名月幾時有」)の出現率が最高になるという非

常におもしろい現象がある。しばらくの間、東坡は世を挙げて矚目する大衆の人物になるのである。これは彼も思いもよらなかったことだろう。

日本に於いても、もちろん東坡にとっての異国の知己を探し出せないはずはない。日本の近代の南画家富岡鉄斎は“施宿『東坡先生年譜』”を収蔵しており、京都の古籍書店思文閣が印刷発行した。倉田淳之助は『蘇詩佚注』を編集出版した。これらはみな頗る典型的な例である。

最後に、蘇東坡と日本文化中の偶然の一致の要素について述べよう。この問題に触れるのは、東坡の人や文学芸術の成就と日本文化の間に何らかの因果関係や、相互影響などの問題を探求しようとするのではない。そうではなく、この二者の間にどんな偶然の一致があったのかを見ようとしているのだ。安藤彦太郎先生は「つまり、日本は古より中国文化圏に属し、中国文化を輸入することによってやっと日本文化の基礎が定まった——こう言っても過分ではない。日本は最初漢字と漢文で本を書き、この点が日本文化の基礎を定めることに決定的な作用を起こしたのだ」（『中国語と近代日本』）東坡が11世紀の日本文化に対して影響を与えたかどうかは、なお断定しがたい。しかし、東坡が近代日本の学者の注意を引き起こしたことは、争えない事実である。これは手当たり次第に取ってきた例証でも、青木正児著『中国文学概説』、『中国文学思想史』および前野直彬主編『中国文学史』などの著作がみな蘇軾に対して高い評価を与えている。彼らは“蘇軾はその師、歐陽修後に再度出現した万能の大天才であり……一流の作品を残している。……宋代一の詩人である。”と考えている。

今我々はもう一度東坡が生きた11世紀、日本の平安時代に戻ってみよう。面白いのは日本文学の中でもっとも早い長編小説『源氏物語』の作者紫式部（978-1066）は、東坡より僅か59年早く生まれているだけだ。このような年齢の差異では、東坡は当然紫式部に対して何らかの影響を生じたはずはない。却って我が国の史学家兼文学者の司馬遷が紫式部に影響を与えていた。関連資料の記載に依れば、紫式部は子どものころ父について『史記』を学んだことがあり、一度目を通したら忘れなかった。我々の注意に値するのは、紫式部の仏教思想であり、『源氏物語』には宿命論の観点が色濃く流れている。

紫式部より59歳年下だった東坡にも仏教思想の刻印がある。これは一種の偶然の一致であると言わざるを得ない。さらに日本文学はとりわけ“雪、月、花”を以って自然美ないし全美意識の核心としている。日本文壇には“雪月花は時に最も心の友”という名言がある。（葉渭渠『日本文学思潮史』）それによれば、日本文学は自然を描写する際、“雪月花”の三種の自然物象を使うことが最も多く、最も美しく、最も熱烈だということだ

(7) 張一璠著「蘇東坡と巴蜀文化」(要綱)

ある。“雪月花”は文学創作の主要な素材であるだけでなく、日本国民の美意識の伝統でもある。こうした自然に対する親近感は、日本国民の自然美に対する堅持と追求、高尚な情操であり、私は深甚なる敬意を抱いている。ちょうどまた我が東坡の“月”に対する賛美も有名である。彼の筆下の月は、多くの人生に対する悟りが寄託されている。「水調歌頭。名月幾時有」(1076年作)は“中秋の詞は東坡の「水調歌頭」が出て以後、私の詞はすべて廃棄する”のようにきわめて高い賞賛を得ている。

その他、書法について言えば、書法は東坡の芸術世界の重要な構成部分であり、書法に對しても自信に溢れている。“私が書は意もともと法なくして造る、点画は手に任せて追求を煩わす”と言っている。日本の書法芸術もまた淵源は深厚である。11世紀だけを例にとっても、日本には前後して管原道真(966-1027)、西行(1118-1190)など著名な書道家が出現している。蘇東坡、管原道真、西行はともに書法というこの芸術領域で各々風流を展開し、交々照り輝かせていると描写できる。これは興奮、感動させられることである。

逝くものはかくのごとく、世の変転は激しい。人類歴史上の11世紀はすでに過ぎ去った。正に東坡がかつて“波は千古の風流の人物を洗い流す”と慨嘆したように、無情の歲月は人類の記憶を消していく。にもかかわらず、我々は今日なお蘇東坡を思い起こすことが出来る。これは疑いもなく一つの奇跡である。これは正に蘇東坡の魅力が尽きることがないことを説明している。“東坡精神”は極めて大きな“可溶性”を持っている。21世紀の今日において、それは依然として我々の精神世界に融合し、精神力を引き出すことが出来る。これがすなわち東坡およびその精神の現代的価値の所在である。

東坡の話題を、我々は永遠に話し続けることが出来るだろうし、我々中日文化の話題も、同じく子々孫々引き続くことが出来るだろう。

2002.10.18

中国綿陽の李白の故郷にて

[訳者後書き]

本稿の著者の張一璠先生は、中国四川省綿陽市の綿陽教育学院教授であり、中国文学研究者としてばかりでなく、詩人、随筆家、書家としても著名な方である。私は1993年に山東省済南市で開かれた“劉鉄雲学会”で初めてお会いして、それ以来文通が続いている。来日したいということだったので、その機会に大分大学での講演をお願いした。快くお引き受け下さり、送って下さったのが本稿である。但し、発表するのが学術誌であることを

考慮し、訳文は「である」調にした。

なお、本文中で<>は、訳者の注釈である。読者の便を考え、煩瑣を厭わず出来るだけ細かい注釈をつけた。